



**Data**

製作・脚本・監督: 金綺泳 (キム・ギヨン)

出演: 金振奎 (キム・ジンギョ) / 朱曾女 (チュ・ジュンニョ) / 李恩心 (イ・ウンシム) / 嚴鶯蘭 (オム・エンナン) / アン・ソングイ・ユリ

## 👁️👁️ みどころ

本作をイム・サンス監督がリメイクした『ハウスメイド』(10年)の女も恐かったが、その本家本元は本作だ。また、マイケル・ダグラス主演の『危険な情事』(87年)の女アレックスも恐かったが、韓国の「下女」はあの女以上に不気味・・・？

2020年2月には『パラサイト 半地下の家族』(19年)がアカデミー一賞作品賞を受賞したが、『下女』が描く1960年当時の「格差」と60年後の現在の「格差」は如何に？

くだらない作品が目立つ邦画に比べ、韓国映画の底力を再確認！機会があれば、ポン・ジュノ作品のみならず、是非50年前のキム・ギヨン作品も！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□ 『下女』のストーリーは？ ■□

本作冒頭、貧しい家庭ながらも、毎日工場に通って一生懸命働きながらコーラス部で歌うことを楽しみにしている若い娘ウニの生き生きとした姿が登場する。そんな労働者階級の娘ウニを家政婦として雇ったのが、大きな家に住み、自前のピアノまで持っているブルジョワ階級のピアノ教師トンシク。ある日、ウニはトンシクを誘惑し、深い関係を持つことになるが・・・。

ブルジョワ家庭を地獄の底に叩き込むウニの狂気が何ともすごい。また、階段と窓を使った効果的なショットは、映画撮影の技法として注目されている。本作は、世界を刮目させたキム・ギヨン監督の最高傑作とされている。

### ■□ さすが1960年の本家本元！vs 『ハウスメイド』 ■□

『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)『シネマ 11』257頁)と『シークレット・サンシャイン (密陽)』(07年)『シネマ 19』66頁)で社会性豊かなすばらしい熱演を見せた

韓国女優チョン・ドヨンが、一転して大胆な肢体(?)のメイド役に挑戦したのが、イム・サンス監督の『ハウスメイド』(10年)だった(『シネマ27』67頁)。同作は、大邸宅のご主人を尻目に妻とその母親そして新入りを審査したベテランメイドが入り組んだ女同士のバトルがめっちゃ面白かった。さらに、一夜のエッチでの妊娠を契機として起きる大騒動も面白かった。しかし、何よりも同作がすごかったのは、そんな展開の中で清楚なメイドが見せる意外なしぶとさと、「復讐」をキーワードとしたあつと驚く行動だった。

それを本作を観て再確認。それは、なぜなら、この『ハウスメイド』はキム・ギヨン監督が1960年に監督した本作を、イム・サンス監督が50年ぶりにリメイクした映画なのだから。つまり、ハウスメイド=下女が映画全般にわたって見せるしたたかさの本来は、本作なのだ。

### ■□■あの時代は?ピアノ、マイホーム、ワンピース!■□■

本作導入部では、日本のかつての「女工哀史」の時代とは全く異質の、イキイキ、ピチピチギャル(?)たち、1960年代の韓国の「女工」が印象的。とりわけ、その華やかなワンピース姿が目につく。女工たちの工場での労働は厳しいようだが、それでもサークル活動が盛んで、チョ・ギョンヒ(オム・エンナン)の合唱サークルの面々は、ハンサムなピアノ教師ドンシク(キム・ギンギョ)に夢中らしい。美しい妻イ・ジョンシム(チュ・ジュンニョ)の内職に支えられながら、ピアノのみならずマイホームまで購入したドンシクは幸せな家庭生活を送っていたが、家計を助けるためギョンヒをピアノの個人レッスンに受け入れ、さらに、下女としてその友人オ・ミョンジャ(イ・ウンシム)を受け入れると・・・。

日本では、池田勇人内閣の「所得倍増計画」によって1950年代後半から高度経済成長が始まり、1958年の東京タワーの建設、1964年の東京オリンピック開催に代表される『ALWAYS 三丁目の夕日』三部作で描かれた「昭和の良き時代」に入ったが、1960年に韓国で公開され大きな話題を呼んだ本作でも、ピアノ、マイホーム、ワンピースを見れば、韓国の「あの時代」を確認することができる。そんな中、今ならハウスメイド、あの時代は下女と呼ばれた女ミョンジャの恐るべき欲望とは?そして、その本性とは?

### ■□■『危険な情事』(87年)以上に『下女』は怖い!■□■

マイケル・ダグラスが家族を愛する弁護士ダン・ギャラガー役で主演したエイドリアン・ライン監督の『危険な情事』(87年)は、互いに「一夜限りの情事」と割り切ったはずの、雑誌社の女アレックス(グレン・クロウズ)がとんでもない女だった。しつこくつきまどってくるのを避けるため電話番号を変えたが、そんな小手先の細工では全く効果がなく、ついにアレックスはダンが購入したマイホームにまで侵入し、最後には悲惨な結末に。アレックスがそんな行動をとった「根拠」は、①あなたが好きなこと、②あなたの子供を妊娠したこと、だが、あの時はお互い大人同士の一夜限りの情事と割り切っていたはずでは・・・?本作でも、ドンシクはある夜ミョンジャの誘惑に負けて(?)一夜限りの情交

を結んだが、その後のミョンジャのドンシクへのつきまとい方は？

本作では、マイホームの台所の棚の中にネズミ退治のための殺鼠剤が置かれているのがミソ。現実には2人の子供がいる家庭で、こんな目につくところに殺鼠剤を置くことは考えられないが、映画的手法としてはそれも OK！ストーリー展開の中で何度も登場するこの殺鼠剤がラストに大きな威力を發揮することは明らかだが、さて、キム・ギヨン監督の演出は如何に？もし可能なら『ハウスメイド』と本作を続けて鑑賞し、50年ぶりの新旧比較をすれば、さらに興味深いはずだ。

## ■格差と階段から『パラサイト』と本作を比較すれば？■

第72回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞したポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)の日本公開が迫る中、2019年12月28日付「朝日新聞 GLOBE+」は「ポン・ジュノ監督『パラサイト』とキム・ギヨン監督『下女』に描かれた韓国社会の『構造』」を掲載した。是枝裕和監督の『万引き家族』(18年)、『シネマ 42』10頁) やトッド・フィリップス監督の『JOKER ジョーカー』(19年)等の「格差」をテーマにした名作が次々とすばらしい賞をゲットしていく近時の時代状況下、『パラサイト 半地下の家族』も「格差」がテーマだった。もともと、「半地下の家族」というサブタイトルは日本人にはサッパリわからないが、その導入部を観れば、半地下住宅の不健康さがハッキリわかる。

他方、実は同作でも「格差」を象徴するものである「階段」が物理的にも大きなポイントになっていた。すると、それはキム・ギヨン監督を尊敬するポン・ジュノ監督がひょっとして本作を真似たため・・・？ついそう考えてしまうほど、本作が描くドンシクのマイホームでは、殺鼠剤が棚の中に収められている台所の他、1階と2階を結ぶ階段が大きなポイントになっている。内職をしている妻が1階で働き、下女の部屋が2階にされていたが、そもそも、それって不自然では？さらに、ピアノを置いたドンシクの部屋は2階にあったから、それはヤバイのでは？「銀ちゃん」こと銀四郎を主人公にした『蒲田行進曲』(82年)では、「階段落とし」がクライマックスとなり、名作を完成させるために誰がそんな命懸けの役に挑むかがストーリー展開の軸になっていたが、本作はそんな巨大な階段ではなく、普通の家の階段だ。しかし、それでも、その上から落ちたら人は死んでしまうはず・・・？

「GLOBE+」の記事を読んだうえで、両作を鑑賞し、そんな「格差」と「階段」の視点から『パラサイト 半地下の家族』と本作を比較してみるのも一興だ。

2020(令和2)年3月30日記